

北海道周遊旅行（2025年6月23日～30日）

クラブツーリズムのツアーにて－新婚旅行以来、42年ぶりの北海道

第1日目（6月23日・月）

中部国際空港を8時40分に出発し、新千歳空港へ。到着後、各地からの参加者を待つため、2時間以上の待ち時間があり、その間に空港内を見学し、昼食をとる。今回の道内観光は、エルム観光のバスで巡る。

到着遅れもあり、空港発は予定より遅れることに。

最初の観光地は「ファーム富田」。一面に広がるラベンダー畑を見学し、その美しさに感動富良野名物のメロンをお土産に3玉購入し、愛知の自宅へ発送。

この日の宿泊は「富良野プリンスホテル」。

館内には、ドラマ『北の国から』に関する展示があり、当時の思い出に浸る時間と

なった。



第2日目（6月24日・火）

朝は富良野からスタート。

まず訪れたのは、神秘的な色合いで知られる**「青い池」**。風が穏やかで、静かな水面に映る青がとても美しかった。次に、**「四季彩の丘」**へ移動。ラベンダーをはじめとした季節の花々が咲き誇る丘を、トラクターバスに乗ってゆったりと見学。北海道らしい広大な風景に癒された。

この日の宿泊は、「サフィールホテル稚内」。夕食



後、夏至の時期でまだ明るい中、JR最北端の**「稚内駅」を散策。海風が強く肌寒かったが、駅構内のセイコーマート（セコマ）**で購入した「あんパン」と「ちくわパン」が温かく、美味しかった。

第3日目（6月25日・水）

朝、稚内港からフェリーに乗って利尻島・鴛泊（おしどまり）港へ向かう。

船上からは、堂々とした姿の利尻山（利尻富士）が姿を現し、その神々しさに目を奪われる。船の周りを飛ぶカモメたちの姿も旅情を添えてくれた。

島内では、仙法師御崎（せんぼうしみさき）で海岸からの利尻富士を眺め、

その後、利尻山を望む名所、オタトマリ沼と姫沼を見学。



「逆さ利尻」を期待して姫沼を訪れるも、さざ波のため湖面の映り込みはやや不鮮明。それでも自然の静けさに癒されるひとときだった。



昼食後、フェリーで礼文島・香深港（かふかこう）へ渡る。

桃岩展望台では、ガイドの案内によるミニハイキング（自然観察）を楽しむ。

その後、礼文島最北端のスコトン岬を訪れる。天気は晴れだったが、風が強く寒さを感じた。

この日の宿泊は、礼文観光ホテル 咲涼（さくりょう）。

第4日目（6月26日・木）

朝、フェリーで礼文島を離れ、再び稚内港へ。

そこからバスで日本最北端の地、宗谷岬へ。

岬からは遠くサハリンの影が望め、まさに「最果ての地」に立った実感が湧く。

午後は、一般道を通りながら信号のない長い直線道路を南下。

バスは北海道らしい広大な景色の中を走り続け、夕方にはサロマ湖に到着。

この日の宿泊は、湖畔に建つサロマ湖 鶴雅リゾート。

静かな湖の風景と上質な宿で、旅の疲れを癒やす夜となった。



第5日目（6月27日・金）

朝はゆっくりめの9時にサロマ湖鶴雅リゾートを出発。

バスは東へと進み、知床半島の観光へ。

まずは、迫力あるオシンコシンの滝を見学。

曇り空の下、今にも雨が降りそうな天候だったが、滝までの遊歩道を元気に駆け上がる。

勢いよく流れ落ちる滝から立ち上るミストを浴び、気分もリフレッシュ。

昼食は「カニの屋」にて、鮭のちゃんちゃん焼き和定食をいただく。

その後は、知床五湖の一つ「一湖」を見学。知床自然センターのガイド付きツアーで、自然や野生動物に関する解説も楽しい時間だった。



高架木道には電気柵が設置され、ヒグマ対策も万全。幸い(?)この日はクマとの遭遇はなく、霧が立ち上る中、シルエットになった2頭の鹿が静かに現れたのが印象的だった。

午後2時15分発の知床観光船「オーロラ」で海へ。

知床半島の断崖やカムイワッカの滝などを眺めながらの30分のクルーズ。波もなく快適だったが、曇り空のため景色はやや残念。

この日の宿泊は、ウトロ港近くの「北こぶし知床」。

館内にはジムも併設された快適なホテルで、知床の自然に囲まれた夜を過ごした。

第6日目（6月28日・土）

朝8時、ホテルを出発。

知床横断道路を通過して峠を越え、**羅臼（らうす）**を經由し、納沙布岬へと向かう長距離バスの日。

途中、バスガイドによる解説で「羅臼岳」や「北の国から」のロケ地（番屋）なども紹介されたが、通過が一瞬で、車窓からは確認が難しかったのが惜しい。



午後、ついに日本本土最東端・納沙布岬へ到着。

北方領土を望むこの地には「本土最東端」や「四島（しま）のかけはし」などの碑が複数立ち、未解決の国境問題を実感する場でもあった。その後は、再び長いバス移動。16時30分、あかん遊久の里 鶴雅に到着

夕食までの時間にホテル周辺の温泉街を散策。阿寒岳を遠くに望みながら、阿寒湖アイヌコタンへも足を延ばした。

孫へのお土産には、木彫りのコタンコロカムイ（シマフクロウ）の**「えんじゃ」キーホルダー**を4つ購入。「お守りになる」との言葉にも心

ひかれた。

夕食は豪華なビュッフェだったが、旅の疲れもあり、胃腸に優しく少なめにいただいた。「もったいない…」と思いつつも、無理はせずに。

第7日目（6月29日・日）

朝9時、ホテルを出発し、この日は釧路湿原の散策と、最終宿泊地となるリゾナーレ トナムへの長距離移動。

まずは温根内（おんねない）木道を約60分かけて散策。

ビジターセンターから整備された木道を歩くと、「ヤチマナコ」と呼ばれる小さな池があり、3メートルほどの棒が半分以上沈む深さを体験。まさに釧路湿原らしい景観。

道中はバスガイドと添乗員の花の説明付きで歩いたが、「ワタスゲ」という花についての解説は尾瀬で見慣れたものとは異なるように思えた。



散策のあとは北斗展望台に立ち寄り、湿原全体を一望。展望台のそばにはピンクのハマナスの花も咲いていた。

昼食は**釧路「ふく亭」**にて、握り寿司付きの和定食を堪能。

その後はバスでトナムへ向けて移動。

一般道から高速道路に入るが、最後部座席のせいか、バスのトイレドアの振動音が気になった。16時頃、リゾナーレ トナムに到着。最上階に近い9階のスイートルームは、二人には広すぎる贅沢な空間。窓からはトナムの象徴的なモザイク模様のタワーを望む。

夕食は大型ビュッフェを避け、満席と聞いていたレストラン「天空」へ直接問い合わせたところ、幸運にも17時の予約が取れた。最後の夜は、豪華な雰囲気の中で質素な夕食をいただく。

翌朝は、早朝にこのリゾートの目玉である雲海テラスへ。

谷間に広がる雲海の中に、タワーが鉛筆のように突き出す幻想的な光景に、言葉を失った。

第8日目（6月30日・月）最終日

ツアーの最終日も観光はしっかりと組み込まれていた。この日は、タウシュベツ川橋梁へのトレッキング。

事前許可が必要なゲートを地元ガイドのジャンボタクシーで分乗し通過。長靴に履き替えて出発。旧国鉄土幌線の廃線跡に残るこの橋梁は、糠平湖の水位によって水没することもあり「幻の橋」とも呼ばれている。

近年は老朽化が進み、崩壊が心配されているが、その姿をこの目に焼き付けることができた。



帰路は道の駅 ピア21しほろに立ち寄り、ハンバーグ弁当を購入。

車中でボリュームたっぷりの弁当を完食し、専用道路を使って新千歳空港へ。16時30分頃到着し、19時30分発の便まで時間に余裕があった。

空港では定番のお土産を購入し、早めに搭乗手続きを済ませてゲート付近で待機。夕食は軽くおにぎりで済ませたのは、きっと「日常へのリセット」の第一歩。

21時30分、中部国際空港着。その後、名鉄・JR・名鉄瀬戸線を乗り継ぎ、23時45分頃自宅へ帰着。最終日も密度の濃い一日だった。

北海道旅行を終えて

◆ 外国人観光客のこと

この旅の記録を書いている今、「日本人ファースト」的なスローガンを掲げる勢力が選挙で躍進している。

一方で、労働者や観光客としての外国人の急増と、少子高齢化による日本人の減少という現実がある。犯罪やマナー違反といった報道がネットで急速に拡散され、不安や偏見を助長しているのではないか。

冷静に、自分たち日本人の側の統計や現実も見つめ、判断すべきと感じた。

◆ 国境の町で

今回訪れた宗谷岬、納沙布岬という日本の国境の町では、外国人観光客の姿はほとんど見られなかった。

ここまでインバウンドが届いていないのは、日本国内の課題とも言える。

一方で、トマムのリゾートには多くのアジア系観光客が集まっており、場所による偏在も実感した。

◆ プレミアムな旅と、旅慣れない私たち

30代から山登りを始めたものの、北海道の山にはついに登らないままだった。

それでも「せめて利尻山を眺める」という目的を果たすため、このツアーを選んだ。

前泊を含めて8泊9日という、人生初の長旅。

主催側の添乗員も「海外旅行並みのプレミアムツアー」と語る通り、ホテルのクオリティも食事も申し分なかった。



最終日のスイートルームにはジャグジーとサウナ、昼食まで含まれる充実ぶり。

しかし、旅慣れない私たち夫婦にとっては、やや贅沢すぎる旅だったかもしれない。バス移動では、下車のたびに膝の痛み悩まされ、飽食とも言えるビュッフェでは罪悪感を覚えることも。

今後、北海道西部へのツアーには興味があるものの、これ以上の長旅は体力的に難しいと感じた。海外旅行は、たぶんもう無理。

そう思わせるほど、この旅は「一生に一度」の充実した体験となった。